

東京家政大学 学修・教育開発センター

クレッド通信
2019.2

CREDD通信 10

Center for Research and Educational Development



教職員研究会

東京家政大学の内部質保証を考える

P. 2 ~ 3



CREDD COLUMN

アクティブラーニングに向けた研修

P. 6 ~ 9

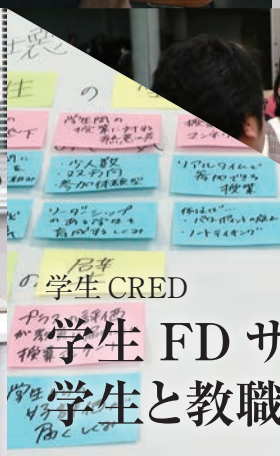


谷川俊太郎さんによる朗読

CREDD TOPICS

たにかわプロジェクト

P. 12 ~ 13



学生 CRED

学生 FD サミット

P. 4

学生と教職員の交流会

P. 5



IR 報告

「IR 情報」冊子を各学科・科に配付へ

P. 10 ~ 11



お知らせ
活動記録 2018.04 ~ 2019.03

P. 14 ~ 15



お知らせ

スタートアップセミナー 自主自律

P. 16

教職員研究会

「東京家政大学の内部質保証を考える」～2nd season～

平成30年7月12日（木）14:50～16:40 / 平成30年9月4日（金）13:00～15:30

はじめに

執筆：平山 祐一郎
学修・教育開発センター 副所長

本年度の教職員研究会の第1部 基調講演は7月12日に、第2部教員の部、職員の部は9月4日に行われました。前者についてはCRED NEWS LETTER Vol.12に速報済です。後者は台風の影響で、教職員のカフェ 兼懇親会は残念ながら中止になりました。

第1部は例年とは異なり、外部講師を招くのではなく、学内人材による実施となりました。これは、大学の教育改革を一般論ではなく、参加する教職員が身近な事柄と感じ、自らの仕事に関連づけることを目的としたためです。そのため、「東京家政大学」の大学改革、授業改革、SD等が講演の中で示され、参加者間で共有することができました。

また、第2部は台風が迫る中、教員の部においては、「ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの整合性検証に関するワーク

ショップ」が開かれました。東京大学の栗田佳代子先生（本学教育改革アドバイザー）、吉田墨先生のご指導のもと、新カリキュラムのディプロマ・ポリシーに応じたカリキュラム・チェックリストの作成を熱心な議論を通じて行いました。

職員の部においては、「認証評価第3サイクルの大学基準と点検・評価項目から考える本学の課題」（ワークショップ）が行われました。年々高度化する認証評価に対応するため、大学、各部署、各職員が取り組むべき「課題」を発見し、実際の行動に移すためのワークを行いました。

第1部 基調講演

東京家政大学の教育改革 ー内部質保証についてー

執筆：山本和人
東京家政大学 東京家政大学短期大学部
学長

現在、東京家政大学を含む渡辺学園全体が、教育改革と教職員の意識改革を重要

課題として取り組んでいます。特に大学では、①平成31年度からのカリキュラム改定、②研究ブランディング事業への取り組みと研究支援体制の整備、③グローバル化への対応、④教育の質保証に向けた取り組み、⑤「将来ビジョン」の策定などを進めてきました。その中で、とりわけ重要なのが教育の質保証の問題であり、本学の教育・研究をめぐる内部質保証の取り組みです。

なぜ大学に内部質保証が求められるかといえば、どのような教育を行う大学であるかを、「外部から見えるようにする」ことに尽きます。そして直接的には、「私立大学等の学生の経済的負担軽減」を実現する上で求められている、「私立大学としての条件整備」なのです。

文部科学省は私学に対する補助金について、大きな政策変更をしました。「競争的資金」としての割合が次第に高くなり、必要な条件整備をしない大学には補助金が出されなくなりました。また、経済界、産業界は、ステークホルダーに対する教育・研究活動の可視化を求めています。それはつまり、私立大学の組織の在り方を含め、高等教育機関たるべき大学であるかどうかを問うているのです。私立大学が高い公共性をもった機関として、しっかりとした内部管理体制・ガバナンスを確保し、財務状況などの情報公開と透明性をもち、中長期的なビジョンを策定した教育・研究活動、事業運営、人材輩出等ができていのかどうかを示さなければなりません。

超少子高齢社会が進む中、補助金が有効に使われるよう、しっかりした高等教育機関であることの証明が必要です。そのための条件が内部質保証であり、その第一歩が3ポリシーの明確化と点検です。さらには、大学の活動全体についてPDCAサイクルをまわし、教育・研究とその結果を示すことが求められているのです。

昨年末に、中央教育審議会が数年にわたり検討してきた、2040年を想定した「高





等教育の将来構想」が答申されました。東京家政大学も、「選ばれる大学」となるためのあらゆる努力をしつつ、教育の質保証とその可視化・研究成果の可視化を図り、新しい東京家政大学を教職員一体となって創り上げていきたいと思います。(基調講演後の教育行政の動きを書き加え、一部加筆してあります。)

第2部 教員

ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの整合性検証

執筆：栗田佳代子・吉田星
東京大学

第2部の教員部門では、各学科のディプロマ・ポリシー（以下、DP）の実効性を高めるため、カリキュラムとの関係性を検討する場でした。全学科の教員参加のため、2部屋にわかれての実施でした。

本ワークショップの目的はDPとカリキュラムの関係性をカリキュラムチェックリスト作成により検証し、より体系的・整合的なカリキュラムを実現することでした。そのための到達目標は、DPをふまえてカリキュラムチェックリストを完成することと、このリストを用いてカリキュラムの改善点を見出して改善する、の2点です。

カリキュラムチェックリストとは、学科ごとに作成され、授業科目とDPがそれぞれ行と列に表示された表です。教員は各学科のグループにわかれ、カリキュラムチェックリストを囲みます。まず、自分の担当科目が主に寄与するDPに、星取表のようにふせんをつけました。次に、各グループでふせんの過多や不足などの偏りを確認しました。例えば、ふせんがあまり貼られていないDPは現行カリキュラムでは達成できない可能性が高く、逆に過剰ならば、DPに対し授業が過剰であることを意

味します。これらを把握した後は、あらためて各授業科目が寄与するDPを再考すべきかどうか等の方針を決め、気になる点をメモとして残しました。

次に教員は、他のグループへ散らばり、他グループのカリキュラムチェックリストについて互いにフィードバックを行いました。そして、元のグループに戻り、他グループで得たことを共有し、あらためて自分たちのカリキュラムチェックリストについて議論を行い、改善のポイントについて整理しました。

今回のワークショップの意義は次のようにまとめられるのではないかと思います。まず、DPが「絵に描いた餅」から、活きたDPになった、つまりDPがカリキュラムと対応したことです。そして、多くの教員がこの作業に関わったことで、カリキュラムの体系性への共通理解が得られたのではないのでしょうか。さらには、他学科のカリキュラムを深く知る機会にもなり得ました。こうした取り組みができていく大学は多くはないと思います。ぜひ、学生にとってよりよい学びの場づくりの先導をしていただければと思います。

第2部 職員

自ら掲げる学園の理念・目的を実現する、主体的に大学運営にかかわる教職員をめざして

執筆：原 裕志
総務部次長

2部事務職員の部の研修会は「認証評価第3サイクルの大学基準と点検・評価項目から考える本学の課題」をテーマに、東京家政大学の大学評価（認証評価）受審機関である大学基準協会による第3期の「大学基準」から、職員それぞれが、大学が何を求められ、家政大学が何をすべきかを考え、各所属部署に関連する大学基準と点

検・評価項目から、日常業務の中で、具体的に自分に何ができるか、何をすべきかについて、事前課題を作成し、当日の討論、まとめ、発表をするワークショップと認証評価第3サイクルの解説を行った。

限られた時間のなかで、各課題ごとの、当日討論は活発で、部署間で、率直で、建設的な意見交換から、学生支援、研究支援など各課題の改善につながるような、提言、意見の必要性が発表された。今回のワークショップは、31年度から共通教育として大学新入生必修の自校教育科目における協同学習の手法により、多様な意見を尊重し、肯定的に相互依存して、メンバー全員が学び合い、教え合い、高め合い、努力を認め合う、積極的に聴き、書き、話す、主体的で積極的な交流を促進するもので、活発な討論の様子から、こうした手法自体が、教職員の日常業務に必要な内容であることを感じた。

ワークショップの後に、鹿沼教育支援センター次長による、認証評価第3期の変更点の解説があり、すべての大学は、自ら掲げる理念・目的を実現するために、各大学基準を順守し、各大学の自己点検・評価を実施すること、各大学における教育研究活動の自主的・自律的な質保証、向上の取組（内部質保証）を重視し、評価することが指摘された。また、組織的な教育・研修（スタッフ・ディベロップメント（SD））活動を通じ、深い学生支援理解、専門的知識・技能、企画立案能力を育成し、主体的に大学運営にかかわる教職員のあり方が明確にされ、さらに業務評価による処遇改善と意欲向上を図ることが説明され、大学基準への理解を深めた。

当日は、菅谷理事長が出席され、学園の財政構造改革を実行し、歴史ある本学の伝統を継続するため、学生の評価を高め、学生確保につなげる職員への期待が述べられた。

学生CREDメンバー5名が、平成30年8月28、29日に京都光華女子大学で開催された学生FDサミットに参加しました。学生FDサミットは、全国の学生FD団体、教職員が一同に会し意見交換を行う場として、毎年2回開催されています。今回は「壊して作れ!!～やる気と無気力の壁～」をテーマに、学生・教員・職員の混合チームで「壁を壊すためには何ができるのか」を議論しました。参加した学生からは「視野が広がった」「今まで『こうだったらいいのに』と思うことがあっても教職員に伝えることをしなかったが、まずは私から教職員の方を知ろうと積極的に行動していきたい」などの感想が寄せられ、充実した2日間となりました。

2018夏

学生FDサミット in 京都光華

2018年8月28日(火) 12:00～19:30、8月29日(水) 9:00～15:30

参加者 学生5名、教員1名、職員1名

家政大学の学生FD活動は発足してから数年しか経っていません。そのため私は学生FD活動をしているのですがその実態についてはよくわかっていませんでした。他の学生さんから、「学生CREDって何」と聞かれても曖昧に微笑み、「学校生活をより良くするために活動しているよ」と回答になっていない回答を繰り返すばかりでした。今回の学生FDサミットのお話は私が学生CREDとして活動して一年が過ぎた頃舞い込んできました。「このまま、ずっと学生FD活動がよくわからないまま活動するの? そんなのは嫌だ!」と思い立ち、今回の参加を決めました。

自分で学生FDや学生CREDについて説明できるように、さらには、胸を張って周囲に活動を自慢できるようになろう!と意気込んで京都に旅立ちました。

今回の学生FDサミットのテーマは「作って壊せ無気力の壁」。壁を壊すためには、どうすれば良いのか、を考えました。さまざまな大学の方々と壁について考え、意見交換しました。その話し合いの過程や、発表を聞き、私が感じたことを少し書き綴ろうと思います。

「壁」とはなんでしょう。目に見える壁

でないことはわかります。物理的ではないからこそ、正体不明、原因不明で困っているのです。そもそも、「無気力」な状態に壁が存在するのでしょうか。無気力であれば壁はできないはずなのです。しかし、学内では無気力の壁がありとあらゆる場所に存在しているらしいのです。

例えば、不満ばかり言う学生。学校や授業に対し沢山の不満を言っています。しかし、それを改善しようと行動に移そうとはしません。なぜでしょうか。どうやら無気力の壁が行動しようとする力の邪魔をしているようです。無気力の壁とは、我々学生の心の中に潜んでいる「諦め」が原因のようです。それは学生だけではなく、教授、職員の方同様に「どうせ、やっても無駄だろうな」という「諦め」が行動を億劫にしているそうです。原因がわかれば無気力の壁の壊し方は簡単です。少しの勇気を振り絞り、行動してみれば全て解決する



のです。しかし、行動するのはとても勇気がいることですよね。誰しも、怖いはずです。だからといって、無気力の壁をそのままにしていいたけではありません。初めの一步を踏み出すにはどうすればいいのか。そのために私たち学生FDがいるのではないのでしょうか。無気力の壁を壊すための一步を提供すること、それが我々のやるべきことであり、私のやりたかったことだと気付くことができました。



都築 咲希 (つづき さき)
人文学部教育福祉学科2年



第5回

学生と教職員の交流会

2018年12月6日(木) 17:00～18:50 / Cafe Luce (16号館食堂)

参加者 学生20名、教員10名、職員5名

プログラム

- 17:00 開会の言葉
- 17:05 学生 CRED からの報告会
- 17:15 学生・教職員それぞれで話し合い
- 17:40 グループ分け
- 17:45 アイスブレイク
学生・教職員で話し合い
- 18:25 発表
- 18:50 閉会の言葉

第5回学生と教職員の交流会に携わらせていただきました、栄養学科栄養学専攻3年の小島佐規です。私は今年の4月から学生CREDに入り、初めてリーダーとして周りに支えられながらこの会を作ってきました。自分の指示が足らずに失敗で終わってしまうのではないかと不安もありましたが、最後まで無事に会を終えることができました。学生CREDは他学年、他学科の学生が集まる団体ですが、それでも毎週時間を合わせてこの会のために色々努力をしてきたので、やりがいがあり、達成感の気持ちでいっぱいです。

今回の学生と教職員の交流会で第5回となりますが、この交流会の1番の良い所とは、“他学年・他学科の学生、色んな教職員と交流が出来ること”です。普段の大学生活では、同じ敷地内にいても他学年・他学科の学生や、授業外での教職員との交流は限られています。なのでこのような交流会を通してお互いを知るなどの交流を深め

ておくことで今後の大学生活においても良い機会だと思います。私は夏に京都で開催された学生FDサミットに参加してきました。そこでは“壊して作れ!!～やる気と無気力の壁～”というテーマで各大学の方々と、学生と学生、又は学生と教職員の壁をどのようにしたら壊すことができるのかという内容で話し合いを行いました。京都で過ごした時間はとても有意義な時間でした。そこで東京家政大学でもこのような壁はあるのではないかと考えたことから今回の交流会でこのテーマを取り入れました。実際の交流会では、とても多くの意見が出ました。その一部を紹介します。

- もっとこのような交流会を取り入れて
いき色んな人とコミュニケーションを
取れるような機会を作る
- 普段の大学生活でコミュニケーション
を取れるような場所を作る
- 教員に何か聞きたいことがあっても研
究室に入りづらい

等、様々な意見が出て、とても充実した話し合いができたのではないかと思います。また、今回の交流会では狭山キャンパスの教職員の方にも交流会に足を運んでいただきました。実際に話をされていてそれぞれのキャンパスで雰囲気等違うような印象を受けました。同じ東京家政大学として、近々狭山キャンパスとの交流会をメインとしたイベントを企画したいと思います。

この会を開催するにあたって、支えてくれたCREDメンバーの皆様、交流会に参加してくださった学生、教職員の皆様本当にありがとうございました。

小島 佐規 (こじまさき)
家政学部栄養学科栄養学専攻3年



ICT教材利用における著作権に関する講習会

図書館 鈴木 恵津子



平成30年9月6日（木）に「ICT教材活用における著作権における講習会」（講師：東洋大学法学部安藤和宏教授）が開催されました。教職員44名が参加しました。

内容は「著作権法の基礎知識」、「教育活動における制限規定」、「ICT活用における著作権問題」、「著作権法改正について」等を柱にご講義いただきました。特に教育活動における制限規定については著作権法第35条43条、47条の適用範囲について詳細に解説され、複製、上演、演奏、上映、口述、はほぼ問題ないとのことでした。講義は90分でしたが、終了後は講師の安藤教授の元に個別質問の長い列ができ、著作物の扱いについて多くの方が高い関心を持たれていることが伺えました。

講習会の事前に日ごろの著作権に関する質問が多数寄せられ、講義の柱に沿って随所随所にQ&Aで回答が挟まれていました。Q&Aをいくつかご紹介します。

Q. 講義スライドの中にネット画像を使用する場合、資料配付の際はその画像を削除しなければならないか。

A. 削除する必要はありません。（著作権法第35条）

Q. YouTubeなどの無料サイトからダウンロードした動画を授業中に提示するのは問題があるか。

A. 動画のダウンロードは著作権法第35条の「学校その他の教育機関における複製」にあたり、授業中の提示は第38条の「営利を目的としない上映」にあたるため、問題ありません。

このようにICT活用に関わる著作権の問題についての質問が多く見られました。「学校その他の教育機関における複製等」を扱う著作権法第35条は公衆送信については従来対象外でした。公

衆送信とは学内ネットワークにのみアクセスできる場所での発信は公衆送信にあたりませんが、たとえばmanabaに著作物を置き、学生に提供することは公衆送信にあたります。

平成30年5月18日、その著作権法第35条が改定され、授業の過程において公衆送信による著作物を無許諾に利用することが可能となります。ただし、補償金の支払いが必要となるため支払制度の構築が現在行われていて、支払制度ができるまでは従来の方法（リンクを貼り付ける、著作権者に許諾を得るなど）をとることとなります。



著作権法第35条の改定は図書館関係者対象の研修会（「平成30年著作権法改正と大学図書館」平成30年11月1日開催）にとても大きく取り上げられました。そこでは「教育利用に関する著作権等管理協議会」代表の方から支払制度構築の進捗状況の説明がありました。補償金支払いとなった際、権利者に公平な配分をするため、大学側では利用した著作物の調査が必須となるとのことでした。この調査体制を学内で整備することが今後課題となりそうです。

著作権法は毎年改定がありますが、平成30年は特に大きな改定がありました。著作権法に関連する動きには常に注視していきたいと思います。



学長裁量研修

効果的かつ効率的な反転授業法開発の取り組み

人文学部心理カウンセリング学科 三浦 正江

心理カウンセリング学科では、2017年度から「動画を用いた効果的な反転授業」をテーマに取り組んでいる。学長裁量研修では、2018年度前期までに本学科で実施した反転授業（講義1科目、演習2科目、実習1科目）と履修者への調査結果について紹介した。

まず、看護の実技習得を目的とした演習科目（看護技術Ⅰ）について、実際に配信された動画を示しながら反転授業（15回中13回分）の報告が行われた。授業ではバイタルサインやベッドメイキングなど多数のスキルを取り上げるが、これまでは授業時に教員が実施する様子をスクリーンに映写し、受講生がそれを見て練習するという形態であった。そこで、各スキルを実施しながらポイント説明のテロップが流れる動画を作成し、これを視聴して各自で練習してくることを予習課題とした。その上で、対面授業ではペア等による練習時間を十分に設け、教員の見回りによる個別指導の時間を確保した。

次に、講義科目（教育心理学）でパワーポイントによる動画教材を用いた反転授業（15回中3回分）について報告された。この授業では、従来の授業で使用しているパワーポイントスライドに担当教員が解説を行う形式の動画を作成し、受講生には、動画を

視聴しながら練習問題に回答する等の予習課題が設定された。その上で、対面授業では練習問題の答え合わせや、従来は取組みなかった演習問題をペア等で実施した。

受講生を対象とした調査では、いずれの授業においても、95%以上が「動画教材はわかりやすかった」、85%以上が「授業の理解が進んだ」と回答した。また、「次の授業でどのようなことをやるのか分かり授業に入りやすくなる」「動画だと、自分のペースで分からないところは何度も復習できた」などの肯定的な感想が多くみられた。最後に、参加者から予習をしてこない学生への対応や予習課題を踏まえた対面授業におけるアクティブラーニングの工夫等に関するご質問をいただき、私自身が今後の課題について考え、貴重な意見交換を行わせていただく大変有意義な時間となった。



学長裁量研修

学習者中心アプローチに則る講義科目における効果的な双方向学習課題の開発

人文学部英語コミュニケーション学科 並木 有希

履修者数の多い講義科目には、学生の主体的な関与を阻む多くの壁があります。第一に、教員の知識伝達为中心となり、学習者の視点に立った学習効果（コンピテンス）の観点を欠きがちなこと。第二に学生が目的、興味、意欲のばらつきが大きく、授業のレベル・目標の設定が難しいこと。第三に、毎回の授業において双方向的な課題を設定することが難しいことがあげられます。このことを念頭に、英語コミュニケーション学科の100人規模の講義科目（「アメリカ文学史Ⅰ、Ⅱ」）において、改善の取り組みを行っています。具体的には、授業で獲得されるべきコンピ



テンスを明らかにし、目標を複数化し明確にしたシラバスを作成すること、この取り組みを通して、毎回の授業の中に双方向

的な課題を設定し、効果を測定すること。そして将来的には、人文学系科目としての普遍的スキルを含んだ到達目標を作成することを目指しています。今回は、シラバス作りと授業内課題に関する実践と発見を共有する時間としました。基礎知識を確定しさらに幅広い教養を与えるためには、教授内容を明確に、扱う範囲とコンテキストを明確にする必要があります。この時に役に立つのが「グラフィックシラバス」であり、学生と共有することで全体の構造が一目で理解でき、内容の過不足も調整できました。授業内のディスカッション課題作成には、本学大学院生の伊藤果菜さんの協力を得て、教材のレベルを適切に設定することができました。他にも、manabaとresponの活用事例、グルーptーク、ミニツツペーパー、レポートといった双方向課題を設定したが、今回の実践では課題も浮き彫りになりました。学生集中のメリハリの難しさ、グループ分けなどの難しさ、採点やグループ管理の業務量をこなすためのTAの必要など、各授業に共通と思われる課題をご紹介しました。ご参加の上コメントをいただいた先生方へ心より御礼を申し上げます。

学長裁量研修

manabaを通したe-learningの推進について

栄養科 重村 泰毅

2018年11月8日に、板橋キャンパス図書館Lプラザにて研修を開催させて頂きました。この取り組みは、2017年度教育改革推進で採択された課題の一つです。manabaは、今年度でまだ導入2年目ですが、学内の多くの先生方にご利用頂いております。今回は、manabaをどのように授業で活用してきたか、使用方法と利用状況を通してご説明致しました。manabaには、出欠点呼・資料提示・小テスト・掲示板・お知らせ機能・レポート提出などの授業で使用する機能がいくつかありますが、今回は「アンケート」機能を中心に授業での活用方法の紹介を進めましたので、その一部を



ここでご説明します。アンケート機能は授業評価アンケートが代表的な使用方法ですが、私は実験などの授業で学生の実験結

果の抽出に使用しています。授業は各班で実験を進めますが、実験内容には作業を通して必ず学生一人一人が得られる結果を組み込んでいます。アンケート機能を通して、学生からその結果を提出させます。その提出結果は、manabaからエクセルで抽出・集計することが可能なので、授業時間内にまとめた学生の結果一覧をスライドに映写して実験結果を考察・コメントします。実験結果のフィードバックをこのように授業時間内に行うことで、各自の実験結果が正しく得られたのかを考えることが可能であり、レポートを書く上での考察の着眼点のヒントを与えています。

英語コミュニケーション学科の小池先生の授業は、学生のレポート機能の利用状況が学内最多であり、当日ご出席頂いていた小池先生からは質疑応答の時間で、その利用方法についてご紹介頂きました。また、板橋だけでなく狭山キャンパスから御参加頂いた先生方からも多く御質問を頂き、今後の活発な利用が期待できる機会となりました。多くの先生方にmanabaをご利用頂き、先生ごと、授業ごとに異なる利用方法を共有することで、新たな利用方法が開発・普及され、学生への学習効果が向上することを願っております。

学長裁量研修

保育所現場との連携による実習評価ルーブリックの開発

保育科 尾崎 司

実習（学外授業）のルーブリック研究に関して、なるべく保育や実習に偏らない汎用的な内容にしてほしいとのオーダーを受け、「報告」と「アクティブラーニングに役立てるために」という2部で研修を構成した。

報告（第1部）では、開発プロセスに焦点を当て、この研究事例から参加者に提案できるポイントとルーブリック作成の勘所についてお話した。ルーブリックは、固定した成績評価に用いるよりは、学習促進機能を重視した形成的評価として用いた方がよいことを提案した。「学生の学習促進・成長モデル」として用いるためには、中間評価をうまく設定することが重要であり、事例を用



いて学生の成長プロセスを提示した。

「アクティブラーニングに役立てるために」（第2部）では、どこから

始めるかというヒントになればと思い、私が本学で実践してきたアクティブ・ラーニングを5つ例示し、その中から1事例（学科を超えて協働して学び合い、地域課題の解決のために商品開発をおこなう）をお話した。その事例からルーブリックを作るとしたら、私だったらどのようなステップを踏み作成するかを、ペルソナ法を援用して提示した後、参加者からの意見や質問を聞いた。

参加者はルーブリックの取り組みに意欲的な方で、自分の授業に引きつけ活用を思案していた。すでにルーブリックに取り組む先生からのコメントでは、ルーブリックの尺度について、量的な差異は分かるが、質的な差異はなかなか設定しづらいという意見があった。要素を加減していくことや、量で差異をつけることなど、評価基準を教員仲間とモデレーションして考えることを伝えた。また、200名規模の授業で形成的に評価するにはどうしたらいいかという質問もあった。私はルーブリックを活用した学習シートを開発して、それを事後学習で100名単位の学生に実施しているが、この授業が承認欲求を満たす場になっており、ルーブリックで評価することが難しい情意領域はルーブリックには入れず、こうした場に対応していることを伝えた。

共催によるFD

CLIL 理論による外国語教授法 ※英語コミュニケーション学科主催

人文学部英語コミュニケーション学科 田頭 憲二 / 人間生活学総合研究科 英語・英語教育研究専攻修士課程2年 伊藤 果菜



英語コミュニケーション学科では、平成30年6月28日(木)に、Richard Pinner先生(上智大学文学部准教授)を講師としてお招きし、上智大学で実践されているCLIL(Content and Language Integrated Learning)に基づいた授業についての講義および授業形式によるデモンストレーションでのワークショップを行い、学内外を問わず多くの参加があった(54名)。

CLILとは

まず、現在、日本のみならず海外においても注目されている外国語教授法の一つであるCLILに関する紹介と説明がなされた。CLILとは、Content and Language Integrated Learning(内容言語統合教授法)の略であり、内容としての教授内容と、言語としての外国語の両方の学習を目指す教授法としての特徴を持ち、外国語学習にとって効果的であるとされている。

CLILを用いた授業デモ

続いて、上智大学におけるCLILを用いた授業(Global English)を用いて、授業形式によるデモンストレーションが行われた。この授業では、参加者とのディスカッションを通して、授業展開が行われた。

具体的には、Kachuru(1985)のThree circle of English speakersを用いた世界における英語の位置づけに関するペア活動から始まり、世界における英語および日本における英語の位置づけに関して、参加者内および参加者と講師との議論が行われた。続いて、公用語として英語を使用している国はいくつあるのか、世界中で使用されているネイティブスピーカーとしての言語で最も多い言語は何か等に関して、参加者による予想やランキング等の活動が行われた。その後、5名のスピーカーの発話音声



を聞き、それぞれの出身国を考える活動が行われ、あらためて、世界における英語についての議論が、クラス全体で行われた。これらは、全て教員による教授内容に関する説明ではなく、このような活動を行うことで、参加者に積極的に関与を求める形で授業が展開された。その後、参加者から外国語教授法に関して質疑応答が行われ、有益な議論がなされた。

その後、参加者から外国語教授法に関して質疑応答が行われ、有益な議論がなされた。

最後に

CLILは、アクティブ・ラーニングなどの本学での学習者主体の授業設計を考える上で、貴重なヒントを与えてくれるものとする。しかし、Richard Pinner先生が指摘しているように、実際にCLILを実施する際の課題の一つとして、様々な協力体制の構築の必要性がある。つまり、ある一人の教員のみが行うのではなく、他の教員との協力(cooperation)がなければ、効果的な教授法として機能をしないというこの指摘は、本学の外国語教育体制およびその他の科目における英語での授業実施を考える上でも、大切な指摘であると考えられる。一方、CLILを行う際には、全てを英語(または他の外国語)で行う必要はなく、その授業の目標や目的に応じて、母語としての日本語の使用を行っても良いというRichard Pinner先生のアドバイスは、今後のCLILでの授業実践を行う上で、一つの安心材料であろう。

CLILは、本学のアクティブ・ラーニングを考える上で、大きな可能性を示してもらえたものとする。他大学におけるCLILを用いた授業づくりの実践例を学ぶことで、教育活動改善の一助として、各授業の目標や目的を再度振り返るきっかけとなった。

参加者の声

- ・実際にCLILの授業を受け、"Global English"を学びながら英語も学んでいることを実感できた。
- ・ディスカッションをすることで能動的に学習している感じがして良かった。
- ・生徒にいろんな表現で意見を発信してほしい、と思いながらも自分がmonocentricに授業をしていることを思い知らされ、自分を振り返ることができた。



IR報告

「IR情報」冊子を各学科・科に配付へ

「IR情報」とは

学修・教育開発センター（CRED）がIR活動を始めて5年目になります。多くの情報を収集・蓄積し、今までにも分析結果の報告や提言を行ってきました。

今回は、大学教育の質保証に向けた取り組みのひとつとして、「IR情報」という冊子を作成し、学長や学科長・科長に配付することになりました。大学版、学科版（11学科※新設のリハビリテーション学科を除く）、科版（2科）の14冊の文書です。教育の現状認識と改善に向けた資料として活用してもらうことを狙ったものです。

この「IR情報」は、manaba上で行われる「年度末達成度アンケート」、大学IRコンソーシアムの「一年生調査・三年生調査」、各授業内で行われる「授業アンケート」、進路ガイダンス時に行われる「進路に関するアンケート」をもとに作られています。

例として、大学版の「IR情報」の目次を以下に記します。

1. 在学中
 - 1.1 学修時間・学修実態
 - 1.1.1 年度末達成度アンケート
 - 1.1.2 一年生調査・三年生調査
 - 1.2 授業評価結果
 - 1.2.1 授業アンケート
 - 1.3 学修成果
 - 1.3.1 年度末達成度アンケート
 - 1.3.2 一年生調査・三年生調査（学生調査設問10）

- 1.3.3 一年生調査・三年生調査の経年変化
- 1.3.4 単位取得状況
- 1.3.5 GPA
- 1.3.6 進路に関するアンケート
（「大学での学びと就職に関する考え」のみ）
- 1.3.7 退学率・休学率
- 1.3.8 科目別成績分布
2. 卒業時
 - 2.1 学修成果
 - 2.1.1 学位取得状況
 - 2.2 就職等進路にかかる実績
 - 2.2.1 就職率と大学院進学率
3. 付録：使用した調査について

今、着目すべきことは

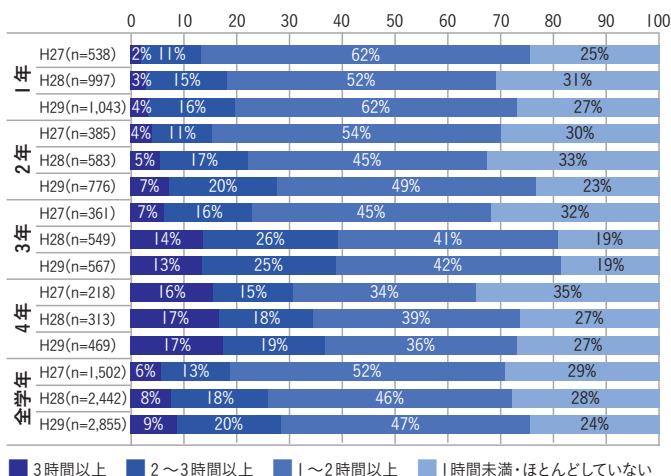
では、以上のような情報から、何を読み取り、大学や各学科・各科は何をしたらよいのでしょうか。

今やるべきことは、来年度（平成31年度）開始の新カリキュラムに備えることです。このカリキュラムの大きな目玉は「CAP44」です。年間の履修単位数の上限を44単位以下とすることで、授業内はもちろん、授業以外の時間もしっかりと学修してもらうことをねらいとしたものです。

したがって、見るべきデータは、授業外学修時間（予習や復習、事前準備等）や学生の授業への積極的な参加状況となります。ま

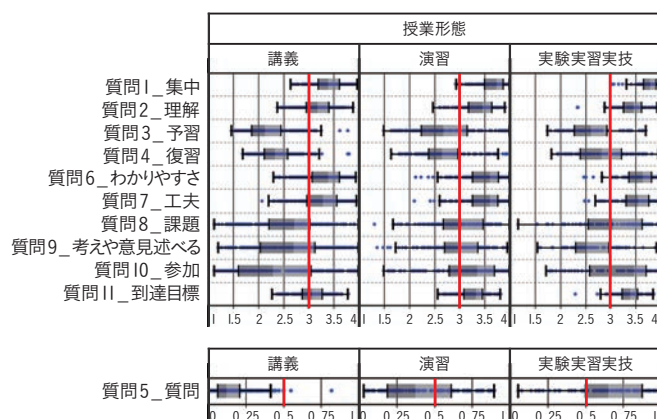
【図1】1日あたりの授業外学修時間
学修時間・学修実態（年度末達成度アンケート）

問. 1日あたりの授業外学修時間は、どれくらいですか。



【図2】授業アンケートの結果

平成29年度、前後期の授業アンケート結果について、授業別に各質問の平均点を算出し、グラフ化。1〜4点の間で点数が高いほど、度合いが高い。質問5は、「担当教員に質問した」と回答した割合を示す。（回答数20件以上の授業506件に限定。グラフ中の赤い線は目安としている点数。）





た、各授業の到達目標が達成されているか、それに応じて、適切な成績評価がなされているか（成績評価の適正・厳格化）、そして、GPAの状況です。もちろん、学生本人の自己の成長の認識も大切になります。

注目すべきデータは

では、大学版のデータの一部を見てみましょう。

達成度アンケートによる「1日あたりの授業外学修時間」（図1）を見ると、「3時間以上」「2～3時間」の合計は、各学年において、平成27年から29年にかけて増加傾向にあります。教員が学生の授業外学修時間の確保に向けた努力を進めており、またそれに応じる形で学生の授業外学修が行われるようになってきているとみられます。また、1年生から3年生にかけて授業外学修の時間も増える傾向にあります。ただし、4年生では授業外学修が微減します。これは、就職活動の影響も考えられますが、履修単位数の減少も原因として考えられます。4年生ですので、卒業研究などの総括的な学びの時間を増やしてもらいたいものです。

図2の授業アンケートの結果を見てみましょう。本学の学生は授業によく集中し、理解しているようです。ただし、予習や復習といった授業外学修の時間はまだまだ不足しています。教員はわかりやすく、工夫した授業をしており、学生は到達目標の達成感も高いので、授業外の学修に向けた課題を出したり、学生の授業参加の機会を増やしたりすれば、東京家政大学の授業はよりよいものになります。また、「講義」に比べて「演習」「実験実習実技」において

得点が高いことから、「演習」「実験実習実技」的要素をできるだけ「講義」にも盛り込むこともヒントとなりそうです。

図3を見てみましょう。2015年に1年生だった学生が2017年に3年生となったとき、同じ質問に答えています。「コンピュータの操作能力」の成長実感はまだまだですが、「時間を効果的に利用する能力」や「批判的に考える能力」、「地域社会が直面する問題を理解する能力」は上昇しています。この3点は大学教育の成果として意義深いものであるので、これらに関する学生の成長実感の増加は喜ばしいものです。よって、今後は、一層の値の向上を目指す必要があります。

最後に進路に関するアンケート結果です（図4）。2年生から4年生にかけて、「学びを通して、選択肢が広がった」という回答が多く、増加傾向がみられます。大学での学びによって、視野が広がったということでしょうが、同時に、それに伴う将来への迷いも増えると思われるので、その点に関する教職員のサポートが求められるでしょう。また、「予想以上に厳しいことが分かった」という値が3年生で多いのは、就職活動を前にした率直な感覚でしょう。しかし、4年生ではその値は低下しますので、多くの学生がそれを乗り越えているといえるのではないのでしょうか。

以上、「大学版 IR情報」の冊子の一部をご紹介しましたが、こうした冊子が学科や科に配付され、その内容が分析・検討されることによって、東京家政大学全体の教育力の向上が期待されています。

解析) 宮東城 文責) 平山祐一郎

【図3】成長の実感

【学生調査：1年生、3年生】

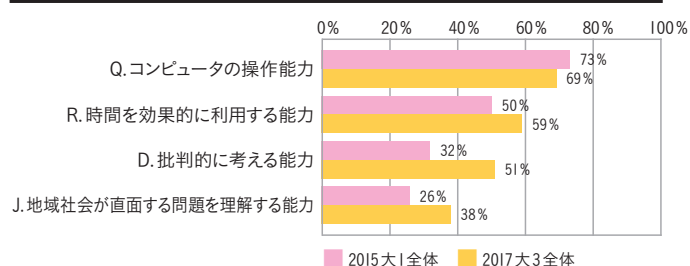
問10. 入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。（一部抜粋）

- D. 批判的に考える能力
- J. 地域社会が直面する問題を理解する能力
- Q. コンピュータの操作能力
- R. 時間を効果的に利用する能力

〈選択肢〉5. 大きく増えた, 4. 増えた, 3. 変化なし, 2. 減った, 1. 大きく減った

※肯定的回答「5. 大きく増えた」と「4. 増えた」の割合の和をグラフ化

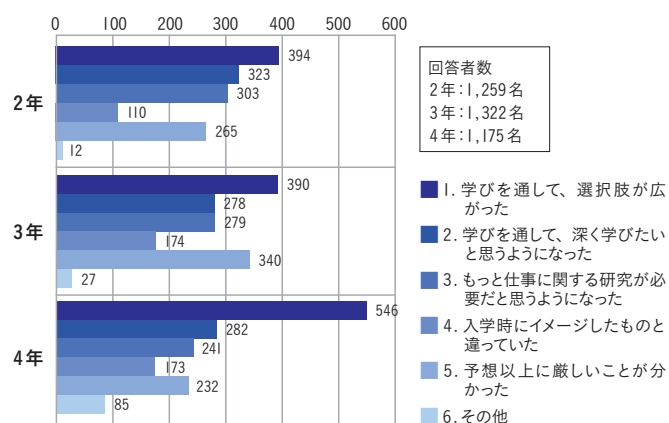
入学後の成長の実感に対する肯定的回答（大学）



【図4】進路に関するアンケート

【進路に関するアンケート】

問4-2. あなたが、大学での学びと就職に対する考えが変わったのは、何が原因ですか。（複数選択・2～4年生）



Kasei no Wa 特別企画

たにかわプロジェクト

—— 学びの輪を広げる

2018年11月22日(木) 15:00~16:30

WS参加者: 学生47名、教職員6名、見学: 学生6名、教職員37名

ラーニングcommonsは「学びへの誘い(いざない)」をコンセプトとして開設3年目を迎えました。より多くの方と学びの輪を広げたいとの願いを込めて、詩人 谷川



俊太郎様をお招きし、Kasei no Wa 特別企画『谷川さんと詩で話そうー「こども・ろうじん」について』を11月22日(木)に行いました。

谷川俊太郎様は、詩作にとどまらず、多くの方々との創作活動を通して、絵本、楽曲を世に出され、87才の今もなお新しい作品を出されております。第4回日本レコード大賞作詞賞(1962年)の「月火水木金土日のうた」は本学の教授であった服部公一先生との楽曲です。また旧知の仲でいらっしゃる元学長片岡輝先生のお力添えにより谷川様にお越しいただきました。



グループ朗読に谷川様が加わるワークショップがメイン企画です。一緒に朗読してもらうには、自分たちが朗読しようとするその詩をどう感じたか、それをどう表現したいかについて谷川様に直接話さなければなりません。はじめはどう話を持って行ったらよいか迷っていましたが、初めの組が谷川様の周りで朗読を始めると、次から次へと、その語らいの場、朗読の輪が

広がっていきました。そして、多くの方が谷川様の力強い表現力を肌で感じられたものと思います。ワークショップに参加した学生・教職員53名と聴衆・スタッフ学生、教職員の方を含めて96名の皆さんで会場は大いに沸きました。



ワークショップの前後では谷川様に朗読していただきました。「朝のリレー」では地球儀を見ながら詩を作ったことなどエピソードを交えてお話いただき、学生からのリクエストを交えた詩の朗読では図書館の所蔵本や学生持参の本を使った図書館ならではの朗読会でした。なかでもみんなで大型絵本「もこ もこもこ」を見ながらの朗読では、心の中でおもわず一緒に「もこ. . もこ もこ」と言ってしまうほどでした。

また、トークショーでの歳を重ねるごとに欲が無くなっていく、とのお話も印象に残っています。さらに、ワークショップをふりかえって「よかった」と評価していただきつつ、これをきっかけに一人一人が深く感じて読むことを大切にしたいとも話してくださいました。

そして最後に Library Mates の皆さんからメッセージブックと花束が手渡されました。Library Mates はじめ多くの学生に準備・運営に携わっていただきました。工夫を凝らしたディスプレイ、ポップを始め、メッセージブックの装丁など、心温まる準備、当日の運営など、ありがとうございました。

備、当日の運営など、ありがとうございました。学生の皆さんもこれをきっかけに、ラーニングcommonsで何かやってみたい、というアイデアが浮かびましたらぜひ一緒に実現させていきましょう。ラーニングcommons運営委員会の教職員は学生の皆さんの新しい学びをバックアップします。この度の特別企画を通して、ラーニングcommonsでの新たな学びの輪が広がっていくことを期待しつつ、報告とさせていただきます。

本企画は Library Mates をはじめ多くの学生の皆様、図書館、学修・教育開発センターの教職員の皆様、および児童学科非常勤講師吉田恵理先生、教授戸田雅美先生のご協力のもと、ラーニングcommons運営委員会が運営しました。ご協力いただいた皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。

新関 隆 (にいぜき たかし)

本学家政学部環境教育学科教授、ラーニングcommons運営委員会委員。





運営に参加した *Library Mates* より

谷川俊太郎さんが東京家政大学の学生を対象としたワークショップを実施すると聞いた当初から、何らかの形で携わりたいと考えていました。谷川さんの作品と初めて出会ったのはおよそ十年前になりますが、それらの独特な表現や世界観に感銘を受けたことは今でも覚えています。

私はこのプロジェクトにおいて、谷川さんへの記念品であるメッセージブックの作成とワークショップ当日の運営に協力しました。メッセージブックは、谷川さんのイメージに合うものを目指し、学生4名でデザインと構成を話し合いました。幅広い学科・学年の学生や教職員の方々が書いたメッセージを一冊の本のようにまとめ、手軽に見られるメッセージブックを作成することができました。

当日は参加学生を誘導した後、谷川さんの生の朗読を聴くという貴重な経験をさせてもらいました。記念品の準備から当日まで長期にわたってこのプロジェクトに携わることができて本当に良かったです。

関根 彩乃（せきね あやの）
家政学部環境教育学科1年

Library Mates の活動の際この行事のことを聞き、教科書に載るような詩を書く人はどんな人だろうという興味から、私はたにかわプロジェクトへの参加を決めました。そして、当日は受付係としてこの行事に携わりました。

私たちはワークショップなどのプログラムには参加できませんでしたが、後ろから参加されている方々の姿を見ているのも楽しかったです。また、ワークショップの時間中に班ごとに谷川さんと群読をするという時間があったのですが、その時の先生方の班の群読は凄かったです。人前で話すことのプロは違うなと感じました。

そして、最初と最後に行われた谷川さん自身による作品の朗読は本当にすごかったです。普通の絵本のはずなのに、私の目の前にパッとその情景が浮かんできて自分で読んだり小学生のころ先生が授業で音読してくれたりしたものより鮮明でこれが作者の力なのだと感じました。

またこのような機会があったらぜひ参加したいです。

O.H.
家政学部児童教育学科1年

活動記録 2018.04-2019.03 (※3月は予定)

学修・教育開発委員会

- 2018年4月19日
 - ・第1回委員会 (外国語教授法に関するFDイベント等)
- 2018年5月24日
 - ・第2回委員会 (平成30年度CRED研修計画等)
- 2018年6月21日
 - ・第3回委員会 (スチューデント・アシスタント (SA) 規程等)
- 2018年7月19日
 - ・第4回委員会 (アセスメントポリシー等)
- 2018年9月20日
 - ・第5回委員会 (ティーチングアワード制度等)
- 2018年10月18日
 - ・第6回委員会 (平成30年度リサーチウィークス等)
- 2018年11月15日
 - ・第7回委員会 (IR情報を利用した平成31年度教育課程編成の検証等)
- 2018年12月20日
 - ・第8回委員会 (平成31年度学修・教育開発センター 規程等)
- 2019年1月24日
 - ・第9回委員会 (平成31年度シラバス第三者チェックについて)
- 2019年2月21日
 - ・第10回委員会 (平成31年度FD・SD研修等)
- 2019年3月20日
 - ・第11回委員会 (平成31年度FD・SD研修等)

学修・教育開発センター会議

- 2018年4月11日
 - ・第1回センター会議 (ポリシー策定の方針とスケジュール等)
- 2018年5月8日
 - ・第2回センター会議 (平成30年度CRED研修計画等)
- 2018年6月5日
 - ・第3回センター会議 (スチューデント・アシスタント (SA) 規程等)
- 2018年7月3日
 - ・第4回センター会議 (アセスメントポリシー等)
- 2018年9月6日
 - ・第5回センター会議 (ティーチングアワード制度等)
- 2018年10月10日
 - ・第6回センター会議 (平成30年度リサーチウィークス等)
- 2018年11月7日
 - ・第7回センター会議 (平成31年度FD・SD年間計画等)
- 2018年12月5日
 - ・第8回センター会議 (平成31年度学修・教育開発センター 規程等)
- 2019年1月16日
 - ・第9回センター会議 (平成31年度FD・SD研修等)
- 2019年2月13日
 - ・第10回センター会議 (平成31年度FD・SD研修等)
- 2019年3月6日
 - ・第11回センター会議 (平成31年度FD・SD研修等)

行事

- 2018年4月4日
 - ・スタートアップ・エクササイズ 2018年版 (配付)
- 2018年4月11日
 - ・manaba操作説明会 (企画・実施) ※板橋キャンパス
- 2018年4月12日
 - ・manaba操作説明会 (企画・実施) ※狭山キャンパス
- 2018年4月20日
 - ・学生支援センター向けmanaba操作説明会 (実施) ※板橋キャンパス
- 2018年4月26日
 - ・学生支援センター向けmanaba操作説明会 (実施) ※板橋キャンパス
- 2018年4月26日
 - ・CREDレター11 (発行)
- 2018年5月28日～8月5日
 - ・前期授業アンケート (実施)

- 2018年5月31日
 - ・第二回新入生歓迎交流会 (学生CRED企画・運営)
- 2018年6月13日
 - ・平成29年度後期授業アンケート結果活用報告書 (発行)
- 2018年6月28日
 - ・共催によるFDイベント「外国語教授法に関するFDイベント」(共催)
- 2018年6月28日
 - ・manaba通信02 (発行)
- 2018年7月12日
 - ・平成30年度教職員研究会 第一部 (企画・運営) ※狭山キャンパス中継
- 2018年7月26日
 - ・CRED通信09 (発行)
- 2018年7月30日
 - ・CREDレター12 (発行)
- 2018年7月30日
 - ・第1回教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発シリーズ「効果的かつ効率的な反転授業法開発の取り組み」(企画・実施)
- 2018年7月31日
 - ・東京大学F Pミニレクチャイベント (企画・運営)
- 2018年9月4日
 - ・平成30年度教職員研究会 第二部 (企画・運営)
- 2018年9月6日
 - ・ICT教材利用における著作権に関する講習会 (企画・運営)
- 2018年9月6日
 - ・manaba通信03 (発行)
- 2018年9月13日
 - ・manaba講習会 (企画・実施) ※板橋キャンパス
- 2018年10月4日
 - ・第2回教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発シリーズ「学習者中心アプローチに則る講義科目における効果的な双方向学習課題の開発」(企画・実施)
- 2018年10月19日～2019年1月30日
 - ・後期授業アンケート (実施)
- 2018年10月25日
 - ・CREDレター13 (発行)
- 2018年11月2日
 - ・平成30年度前期授業アンケート結果活用報告書 (発行)
- 2018年11月2日
 - ・前期授業アンケート集計結果 (公開)
- 2018年11月8日
 - ・第3回教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発シリーズ「manabaを通じたe-learningの推進について」(企画・実施)
- 2018年11月1日～17日
 - ・大学IRコンソーシアム「学生調査」(実施)
- 2018年11月26日～12月15日
 - ・後期授業公開 (企画)
- 2018年12月1日
 - ・平成29年度 教育改革推進 (学長裁量) 経費予算による研究・開発の成果報告書(発行)
- 2018年12月6日
 - ・学生と教職員の交流会 (学生CRED企画・運営)
- 2018年12月6日
 - ・第4回教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発シリーズ「保育所現場との連携による実習評価ループの構築」(企画・実施)
- 2018年12月13日
 - ・manaba通信04 (発行)
- 2019年1月11日
 - ・CREDレター14 (発行)
- 2019年1月23日
 - ・シラバス作成に関する研修会
- 2019年2月8日
 - ・アセスメントポリシーを踏まえた成績評価に関する研修会 ※狭山キャンパス中継
- 2019年2月14日～2月28日
 - ・リサーチウィークス (実施)

- 2019年2月18日
・リサーチウィークスオープニングレクチャー（企画・運営）
- 2019年2月19日
・自校教育科目「スタートアップセミナー 自主自律」教員研修
- 2019年2月20日
・リサーチウィークスFDフォーラム（企画・運営）
- 2019年2月22日
・CRED通信10（発行）
- 2019年2月25日
・平成29年度 教育改革推進（学長裁量）経費予算による研究・開発の成果発表会（企画・運営）
- 2019年3月11日
・自校教育科目「スタートアップセミナー 自主自律」教員研修
- 2019年3月14日
・manaba通信05（発行）
- 2019年3月12日
・第5回教育改革推進（学長裁量）経費予算による研究・開発シリーズ「英語力向上を目指すe-learningプログラムの開発」（企画・実施）
- 2019年3月26日
・自校教育科目「スタートアップセミナー 自主自律」教員・SA研修（企画・運営）

出張歴

- 2018年5月9日
・東京都私立短期大学協会平成30年度春季FDフォーラム
@アルカディア市ヶ谷「私学会館」：宮東城
- 2018年5月25日
・大学FD学習会
@赤坂山王健保会館：宮東城、矢野穂
- 2018年6月8日
・平成30年度私立大学等経常費補助金説明会
@文教学院大学 仁愛ホール：矢野穂
- 2018年6月8日
・金沢大学・山形大学・大正大学合同シンポジウム
@一橋講堂 中会議場：安積和広
- 2018年6月21日
・会議ファシリテーションセミナー
～アイデアと納得を引き出し、目的を達成する～
@早稲田大学 早稲田キャンパス：安積和広
- 2018年6月22日
・大学IRコンソーシアム第1回定時総会
@甲南大学 岡本キャンパス：宮東城
- 2018年6月22～23日
・「学修ピアチューター制度の設計」研修
@金沢大学 角間キャンパス：矢野穂
- 2018年8月28～29日
・学生FDサミットin京都光華
@京都光華女子大学・短期大学部：井上俊哉、矢野穂、学生CRED5名
- 2018年9月12、14日
・大学IRコンソーシアムワークショップ
@大正大学：宮東城
- 2018年10月14日
・熊本大学インストラクショナルデザイン公開講座 入門編
@東京工業大学：安積和広
- 2018年11月1日
・「授業が変わる！学生が変わる！SA・TA活用のからくり」研修
@成蹊大学：矢野穂
- 2018年11月9日
・第10回大学マネジメント改革総合大会
@筑波大学 文京校舎：安積和広
- 2018年11月15日
・自校教育科目教材録画のための出張
@高砂地区センター：兼古昭彦、田中恵美子、矢野穂、学生2名

- 2018年11月17日
・IRデータの基礎分析と可視化
@明治学院大学：宮東城
- 2018年11月22日
・東京都私立短期大学協会 平成30年度秋季FDフォーラム
@アルカディア市ヶ谷「私学会館」：宮東城
- 2018年12月14日
・manabaユーザー会 2018年度
@フクラシア丸の内オアゾ：安積和広
- 2019年3月21～22日
・学生FDサミットin 島根県立大学
@島根県立大学：学生CRED2名

新規 & 追加購入文献

- 「大学職員論叢第5号（平成29年3月）」 大学基準協会
- 「大学職員論叢第6号（平成30年3月）」 大学基準協会
- 「図解 アクティブラーニングがよくわかる本」 小林昭文、講談社
- 「図解実践！アクティブラーニングができる本」 小林昭文、講談社
- 「笑育（わらいく）—— 笑い」で育む21世紀型能力」 松竹芸能事業開発室「笑育」プロジェクト（著）、井藤元（監修）、毎日新聞出版
- 「知の越境法 「質問力」を磨く」 池上彰、光文社
- 「「ミッション」は武器になる あなたの働き方を変える5つのレッスン」 田中道昭、NHK出版
- 「国語ゼミ AI時代を生き抜く集中講義」 佐藤優、NHK出版
- 「専業主婦になりたい女たち」 白河桃子、ポプラ社
- 「仕事と家族 - 日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか」 筒井淳也、中央公論新社
- 「働く女子の運命」 濱口 桂一郎、文藝春秋
- 「育休世代」のジレンマ 女性活用はなぜ失敗するのか？ 中野円佳、光文社
- 「結婚と家族のこれから 共働き社会の限界」 筒井 淳也、光文社
- 「なぜ女性の仕事は辞めるのか 5155人の軌跡から読み解く」 岩田正美（編著）、大沢真知子（編著）、日本女子大学現代女性キャリア研究所（編）、青弓社
- 「大学教育アセスメント入門ー学習成果を評価するための実践ガイド」 バーバラ・ウォルワード（著）、山崎 めぐみ（翻訳）、安野 舞子（翻訳）、関田 一彦（翻訳）、ナカニシヤ出版
- 「学生の学びを測るーアセスメント・ガイドブック（高等教育シリーズ170） リンダ・サスキー（著）、齋藤 聖子（翻訳）、玉川大学出版部
- 「アクティブラーニング入門2」 小林昭文、産業能率大学出版部
- 「協調学習とは 対話を通して理解を深めるアクティブラーニング型授業」 三宅なほみ（著）、東京大学CoREF（著）、川合塾（著）、北大路書房
- 「学習成果ハンドブック」 大学基準協会

2018年度、CRED は以下のメンバーで活動しました

所長	井上俊哉（心理カウンセリング学科）
副所長	平山祐一郎（児童学科）
参事	走井洋一（児童教育学科） 大西淳之（栄養学科） 佐藤隆弘（児童学科） 並木有希（英語コミュニケーション学科）
センター専任職員	宮東城 安積和広 矢野穂
センター嘱託職員	山本優子
センター業務補助員	石原明里 塩原夏奈

スタートアップセミナー 自主自律

1. 新しい自校教育科目開設の背景

平成22年に全学共通教育科目の一つとして開設された「本学の創立と建学の精神」は、非常に意義深く高評価を得てきましたが、選択科目だったこともあり履修者は限定的でした。そのため、平成28年度に当時の川合貞子学長より全学必修の自校教育科目開設の要請を受けて、同年11月に自校教育科目開設準備委員会が発足し準備が始まりました。平成30年度における前期後期2クラスずつの試行的な開講を経て、平成31年度に32クラスを開講することになりましたので、これまでの進捗状況等をご報告します。

2. 科目の目的

「自主自律」という言葉からは「独立」「他に頼らず」といった印象を受けるかもしれませんが、社会で何かを成し遂げるために「一人で」できることは限られます。実社会で直面する課題の達成には協同が不可欠であり、協同は自主自律であるための必要条件と言えます。また、学生の主体性（自主自律）を伸ばすには、学生が相互に協力して学ぶ協同学習が有効であることが、内外の先行研究や国内他大学の先進的取り組みからも明らかです。新しい自校教育科目では、教員が本学の歴史などを知識として伝授する（教え込む）形式をとらず、本学の歴史に関わる文献を読み学生どうしが対話的に学ぶことで自主自律を体得することを目指しています。

東京家政大学に入学したばかりの1年生どうしが、同じ大学で学ぶ同期として、学科の違いを超えて協同して課題に取り組むこと、東京家政大学で学ぶことに喜びと誇りを持ち、他者と協同する力、主体的に学び続ける姿勢を獲得し、「自主自律」の生き方、「愛情・勤勉・聡明」にもとづいた生活に向けて一步を踏み出すことが、新しい自校教育科目「スタートアップセミナー 自主自律」の目的です。

3. 科目の特徴

- 家政学部・人文学部の1年前期必修科目とし、1クラス40名の32クラスを開講します。
- 全クラスを家政学部・人文学部の全学科の学生で構成します。
- 全クラスを家政学部・人文学部の全学科から選ばれた専任教員が担当します。
- 1クラスを5名×8グループに分け、学生主体の協同学習を行います。
- 学生どうしの学び合いを支え、1年生と上級生の繋がりを作るために、各クラスにスチューデントアシスタント（SA）1名を配置します。
- 他者との協同を通じた気づき、授業や課題への主体的な関与を最大限に重視します。
- 教員は、学生が主体的に学び合う環境を整えることに専念します。

4. 授業計画

- 第1回・第2回 授業の特徴の確認・共有／協同学習の理論と技法を学ぶ。
- 第3回～第8回 東京家政大学の歴史から学ぶ。
- 第9回～第14回 社会と向き合うプロジェクトに取り組む。

5. 履修者の声

最後に、平成30年度前期に試行的に開講した木曜3限の授業から、履修者の声の一部を紹介します。

●第8回の終了後

（第3回～第8回：東京家政大学の歴史から学ぶ）

- 最初は大学の歴史を何のために学ぶのだろうと不思議に思っていたけれど、今までの数回の授業を通して、本学は女性の社会進出や自立に向けて後押ししてくれるカリキュラムが揃っている学校だと感じました。また新しい課題でもチームを変えて積極的に取り組みたいです。
- 一人一人資料を分担したことで、自分の調べたことに繋がったり、知識が増えて、理解がより深まりました。また、ジグソー法では、違うところを切り取っていると自分のまとめの偏りに気づくことができ、また同じであれば重要なところを選べた、再確認にもなりました。仲間との信頼が深められて良かったです。
- 東京家政大学の歴史について考えてきて、たくさんの人と関わり色々な意見を聞いて多面から考えることができてよ

かった。また、この大学は長い歴史の中でたくさんの人の努力があったからこそ今の大学につながっていることがわかった。

●第15回の終了後

（第9回～第15回：社会に向き合うプロジェクト）

- 15回を通して、意見が言えるような人になりました。毎回刺激的な意見を聞け、たくさんの学科の方とかかわれて良かったです。
- この授業を通して、女性の周りにある様々な問題について考えることが出来ました。言葉として知っていても実際にどのような現状があるのか知る機会はありませんだったのでこの授業がきっかけとなって、どのようなことが起きていて、対策として国や社会がどのようなことをしているのか知れて良かったです。発表については根拠をあげつつ行うことが出来ました。班のメンバーで、協力して作りあげることが出来て良かったと思います。
- 今日でこの授業は終わりだけど、授業で女性が働く上での問題などを知ることができて、これから自分も働く立場に立つときが来るし、問題を意識して生活していくことも大切だと思ったので、授業が終わったから終わりではなく、これからの生活でもこんな問題もあるのだと意識していきたいと思いました。
- 他学科の人と交流できて、とても嬉しかったです。協力し合って団結力を高めることが出来、みんなで作り上げた達成感がありました。グループとして最優秀賞をいただき、皆の努力の結果が出たこと本当に嬉しかったです。良い経験が出来て良かったです。これからに生かしていきたいと思います。

- うまくできるか不安で発表時も緊張したけれどグループで協力して準備し、発表も成功して良かったです。グループで協力して一つのことに取り組む大切さを知れて良かったです。また、他のグループでは違った視点や方法で発表して、まとめかたも違ったので参考になりました。この授業は楽しかったので良かったです。ありがとうございました。

井上 俊哉（いのうえ しゅんや）

本学人文学部心理カウンセリング学科教授（心理統計研究室）、学修・教育開発センター所長。平成3年本学着任／研究分野：教育心理学、心理統計学／著書：『メタ分析入門』（東京大学出版会）、『心理検査法入門』（福村出版）、『心理統計の技法』（福村出版）

